

研究テーマ「集合住宅対象侵入窃盗の時空間的近接と地域特性との関係」

東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻・准教授 樋野 公宏

要約

既存研究においては、住宅侵入盗被害に遭った住宅は再び被害に遭いやすいという「反復被害」や、被害に遭った住宅の近隣の被害リスクも高まるという「近接反復被害」という時空間的パターンが示されている。しかし、集合住宅を扱った研究は少数であり、同一住戸の反復被害（図中 Repeat）、同一建物内別住戸の被害（図中 NR-b）、近隣建物の近接反復被害（図中 NR）を区分した研究はない。本研究は、福岡市における集合住宅の侵入窃盗の時空間的パターンを建物レベル、住戸レベルで分析した。対象は、福岡県警から提供された 2005 年から 2014 年の間に発生した 8,845 件のデータである。被害経験のある建物、被害経験のある住戸での被害が全体に占める割合はそれぞれ 31%、8.4%だった。建物レベルでの分析では、同一建物内別住戸の被害を除外しても、最初の被害から 300m、70 日以内において、近隣建物の近接反復被害傾向が見られた。住戸レベルでの分析では、同一住戸の反復被害リスクは 160 日以内において有意に高く、同一建物内別住戸の被害リスクは 100 日以内において 2 倍程度高かった。このように、本研究では集合住宅における反復被害、近接反復被害のリスクを示した。これは、戸建住宅を対象とする既存研究で示されてきたモデルの適用範囲を広げる点で学術的貢献を為すと言える。最後に、わが国の文脈を踏まえて反復被害、近接反復被害の対策を議論した。

